

引用する

レポート・論文を書く上での必要条件の1つに、引用することがあります。引用とは、「自分の説のよりどころとして他の文章や事例または古人の語を引くこと」（新村編，2012，p.225）です。私は今まさに、『広辞苑』から引用しました。なぜ、『広辞苑』を引用したのでしょうか？それは読者の皆さんに信用してもらうためです。皆さんにとって、どこの馬の骨ともわからない私が引用について説明するよりも、有名な辞典である『広辞苑』の説明を紹介した方が納得してもらえるからです。

ではなぜ、新村さんという編者の名前、2008年という発行年、さらには、引用したページ数まで示したのでしょうか？このように明記することがルールだからです。なぜこのようなルールがあるかという、私が引用した内容を皆さんが『広辞苑』を使って確認することを可能にするためです。レポート・論文はエッセイや小説ではないため、自分の思いや経験のみを語るものではありません。論文の内容は、他の人が再検証したり、吟味できるものになっていなければなりません（山内，2001，p.156）。引用がルールに基づいて行われることによって、レポート・論文の説得力が増します。

蛇足ですが、レポートや卒業論文で私が最初にチェックする箇所は、引用と参考文献の記述についてです。なぜなら、ルールに基づいて引用と参考文献が表記されることが、重要な評価項目の1つであるからです。それだけでなく、引用と参考文献がルールに基づいていないレポートや卒業論文は、内容も乏しいものになっている傾向があるためです。「神は細部に宿る」という格言がありますが、引用や参考文献といった細部に神経が配られていないレポートや論文は、内容の細部についても同様の傾向があります。論文は論理を積みかさしていくものですから、いい論文を作り上げる必要条件の1つとして、細部にこだわるという点があげられるでしょう。引用や参考文献をチェックすることは、当該レポートや論文が細部まで神経が配られているかを評価者が確認する上で、効果的な指標となります。レポート・論文で高い評価を得るためにも、引用や参考文献の作法を身につけていきましょう。

1. 直接引用と間接引用の違い

引用の仕方は大別して、直接引用と間接引用があります（高橋，2014）。直接引用と間接引用のどちらも、出典（出所である文献）を明示する必要があります。直接引用は、参考文献に書かれている文章をそのまま抜き書きしたものです。直接引用には二種類あり、①筆者自身の文の中で「」に入れて引用する場合（短い引用）と、②段落を変えてある程度まとまった量の引用を行う場合（ブロック引用）があります。短い引用は一行から二行程度を引用する場合に用い、引用する文を「」に入れて引用します。以下の文献を短い引用で示してみます。

屋良健一郎（2015）史料から考える：種子島の歴史を例に。名桜大学編 名桜叢書第2集やんばるに根ざす。名桜大学，pp.272 - 283.

（原文）

最後に、繰り返しになりますが、日本史を学ぶ上で大事なものは、暗記ではなく、史料を探すための活動力、史料から何かを見つける観察力、史料と向き合い続ける忍耐力だと思います。中学・高校で「日本史は暗記ばかりで苦手だな」と思った人にも、ぜひ、大学での日本史の学びに触れてほしいと

思います。

(例) 短い引用

屋良は「日本史を学ぶ上で大事なものは、暗記ではなく、史料を探すための活動力、史料から何かを見つける観察力、史料と向き合い続ける忍耐力」(屋良, 2015, p.283) と述べている。

「」のなかの部分は、原文を一字一句変えることなく引用します。引用した後に、著者名、発行年、引用したページ数を記述します。

一方でブロック引用は、引用した部分の前後を1行ずつあげ、それまでの文よりも段を下げて(字下げして)表記します。このようなブロック引用は、引用する分量が3行以上になる場合に用います。以下の文献をブロック引用で示してみます。

フロム：日高六郎訳(2013)自由からの逃走(第120版)。東京創元社。

(原文)

生理的に条件づけられた要求だけが、人間性の強制的な部分ではない。ほかにも同じように強制的な部分があり、しかもそれは肉体的過程にではなく、生活様式と習慣の本質そのものにもとづいている。すなわち、外界と関係を結ぼうとする要求、孤独を避けようとする要求がそれである。まったくの孤独で、他から引き離されていると感ずることは、ちょうど肉体的な飢えが死をもたらすとおなじように、精神的な破滅をもたらす。他人と関係を結ぶというのは、肉体的な接触をいうのではない。

(例) ブロック引用

フロムは飢えや渇きといった生理的に条件づけられた要求と同様に、人間性には強制される部分があると考え、次のように述べている。

⇒字下げする

(1行あける)

生理的に条件づけられた要求だけが、人間性の強制的な部分ではない。ほかにも同じように強制的な部分があり、しかもそれは肉体的過程にではなく、生活様式と習慣の本質そのものにもとづいている。すなわち、外界と関係を結ぼうとする要求、孤独を避けようとする要求がそれである。まったくの孤独で、他から引き離されていると感ずることは、ちょうど肉体的な飢えが死をもたらすとおなじように、精神的な破滅をもたらす(フロム, 2013, p.25)

(1行あける)

人間性の中には固定された変化しない要素があり、その1つに孤立や精神的な孤独を避けようとするものがあるという。

ブロック引用した箇所も、原文を一字一句変えることなく引用します。

次に間接引用について説明します。間接引用は直接引用とは異なり、自分の言葉で書き直した(要約した)引用にあたります。以下の文献を間接引用で示してみます。

瀧川裕英(2003)責任の意味と制度。勁草書房。

(原文)

したがって以下では、責任概念を、関与としての責任（関与責任）・負担としての責任（負担責任）・責務としての責任（責務責任）の三類型で分析する。

（例）間接引用

瀧川は責任概念を、関与責任、負担責任、さらには責務責任の3類型に区分している（瀧川，2003，p.30）。

間接引用の場合は、「」を用いなくて示します。直接引用と同様に、著者名、発行年、引用したページ数を記述します。よくある間違いとして、句読点の後に著者名、発行年、引用したページ数が記述されることがあります。間接引用の場合は、句読点の前に示すことが正しい形式になります。もしくは、以下のように示すことも可能です。

瀧川（2003）は責任概念を、関与責任、負担責任、さらには責務責任の3類型に区分している。

この間接引用は、連続しない複数のページの内容を示したい場合に用います。間接引用は、1ページの限られた内容だけを示す場合に限らず、文献全体の内容を要約する場合にも用いられます。

学問領域によって、直接引用と間接引用を使用する頻度は異なってきます。短い引用やブロック引用といった直接引用は、人文・社会科学の分野の論文において使用される機会が多いですが、自然科学の分野においては使用される機会が少ないと言えます。自然科学の分野では、間接引用のみによって論文が完結されるケースがほとんどです。しかしながら、人文・社会科学＝直接引用、自然科学＝間接引用というわけではありません。どちらの分野においても、直接引用と間接引用を適切に使い分けることが、優れた論文を書く上での1つの条件になっています。

直接引用と間接引用を適切に使い分けることは難しいかもしれません。原則として、間接引用の表記ではレポート・論文の論証過程に問題が出る場合に、直接引用を用いてください。人文・社会科学の分野では、ある概念がどのように意味づけられるかが研究の目的となります。例えば、「文化とは何か」、「ケアリングとは何か」、さらには「スポーツとは何か」といった研究目的が設定されることもあります。その際に、これまでの研究者がそれぞれの概念をどのように論じてきたかを確認し、引用する必要があります。概念について論じた研究者の主張は、要約することで意味が変わってしまう可能性があります。このような場合には、直接引用を活用することが求められるでしょう。また、哲学や文学の領域においては、著名な哲学者や作家による主張を解釈することが研究の目的となりえます。このような場合には、哲学者や作家の言葉を一字一句変えることなく引用する必要があります。

研究のテーマや目的によって、直接引用と間接引用を使い分けることを意識して、レポートや論文を作成しましょう。もちろん、自分の言葉で要約することが面倒であるため、直接引用を用いていることが明白なレポートや論文は、評価が低くなることは肝に銘じておいてください。

2. 引用の形式を選択する

学問領域や学会によって、引用の形式は異なっています。著者名や発行年を示すなど、共通する点もありますが、異なっている場合もあります。読者の皆さんが卒業論文を書く際には、指導教員の学問分野や所属する学会のルールにならうことになるでしょう。引用の形式は、どの学問分野や学会によるも

のが絶対的に正しいというわけではありません。そのため、卒業論文だけでなく、レポートを作成する際も原則として、教員からの指定がない限りは、皆さんが参考にしたい学会によって示された引用の形式にのっとっても構いません。

しかしながら、例えば1章と2章で異なる引用の形式によってレポートや論文を作成するといった手順を踏んではいけません。レポートや論文では、引用だけでなく、他の形式においても統一性があることが重要になります。世間においてもダブルスタンダード(二重基準)は批判される傾向にありますが、レポートや論文においてはさらに厳しく批判されます。レポートや論文を書き始める際には、まず、どの引用の形式を採用するのかを定めましょう。

本節では、「一般社団法人日本体育学会」という学術団体の機関誌である、「体育学研究」に定められたルールに則り、引用例について示します。「体育学研究」による引用の形式を採用するのは、私が所属する学会であることもありますが、引用の形式が細部まで定められているためです。また、体育学では、体育哲学や体育社会学といった人文・社会科学の領域と、運動生理学やバイオメカニクスといった自然科学の領域の融合が目指されています。「体育学研究」には、人文・社会科学の方法によって生産された論文だけでなく、自然科学の方法によっても生み出された論文もあります。論文はインターネット上で、無料公開されており、実際の論文を読んで引用の形式を学んでもらうためにも、本節では「体育学研究」に定められたルールを取り上げます。「体育学研究」に掲載された論文は、以下の URL から入手可能です。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/kikanshi>

3. 「体育学研究」の書式にのっとって引用する

基礎編

・著者が2名の場合

著者が2名で和文の場合には、双方の著者名の間に中黒(・)、英文の場合には“and”を用いてつなぎます。著者名はフルネームではなく、姓名のみを記述します。

次の文献を引用する場合は下記のようになります。

卯田卓矢・松井圭介(2017) 茨城県常総市におけるフィルムコミッション活動の展開と特性：民間施設のロケ地提供に着目して. 人文地理学研究, 37: 41-62.

卯田・松井(2017)によれば～

～と指摘されている(卯田・松井, 2017, p.61)。

Mulhall, S. and Swift, A. (1992) Liberals and communitarians. Blackwell.

Mulhall and Swift (1992)によれば～

～と指摘されている(Mulhall and Swift, 1992)。

・著者が3名以上の場合

著者が3名以上の場合にはすべての著者名は記述せず、筆頭著者の姓の後に「ほか」を記述し、英文では“et al.”を用います。

次の文献を引用する場合は下記のようになります。

石橋千征・加藤貴昭・永野智久・仰木裕嗣・佐々木三男（2010）バスケットボールのフリースローの結果予測時における熟練選手の視覚探索活動．スポーツ心理学研究，37（2）：101 - 112.

石橋ほか（2010）によれば～

～と指摘されている（石橋ほか，2010）。

Bredemeier, B. J., Shields, D. L., and Horn, J. C. (2003) Values and violence in sports today: The moral reasoning athletes use in their games and in their lives. In: Boxil, J. (Ed.) Sports ethics: An anthology. Blackwell, pp.217-220.

Bredemeier et al. (2003) によれば～

～と指摘されている（Bredemeier et al., 2003）。

・翻訳書を引用する場合

翻訳書を引用する場合には、翻訳者の氏名ではなく、著者名のみを記述します。その際に、翻訳書に示されたカタカナ表記の姓名を記述します。著者名がカタカナ表記をされていない書籍は、アルファベットで表記する。

次の文献を引用する場合は下記のようになります。

ヨナス：加藤尚武監訳（2010）責任という原理：科学技術文明のための倫理学の試み（新装版）．東信堂．

ヨナス（2010）によれば～

◎インターネット編

皆さんはこれまでの学校教育の中で、インターネット上の情報の危うさについて、教えられる機会があったのではないのでしょうか？出所のわからない、信憑性に乏しい情報がインターネット上には溢れています。意図的に誤った情報を流布させようとする人達も存在すれば、誤った情報を広げる意図はないにもかかわらず、正しい情報と勘違いをして、結果的に誤った情報を流してしまう人達も存在します。一方でインターネットには、レポート・論文を作成する上で紙媒体の文献では探すことが出来ないような、有益な情報が少なくありません。インターネット上の情報は玉石混交であるため、一律にインターネット上の情報をレポート・論文を作成する上で禁止することは問題が生じます。

大学でレポートや論文を作成するにあたっては、ウィキペディアを引用することが禁止される傾向にあります。しかしながら、ウィキペディアはレポートや論文を書く上で参考にならないとは言えません。私自身も、論文を作成する上で、ウィキペディアの内容を読むことがあります。ウィキペディアの記事

を直接的に引用することは決してありませんが、記事に書かれた参考文献を引用することはあります。ウィキペディアの記事には、参考とした文献がすべてではありませんが、示されていることがあります。示された文献に直接あたり、レポートや論文に引用することは間違った行為ではありません。ウィキペディアもこのような形で活用し、皆さんのレポート・論文の作成に役立ててもらいたいと思います。

以上のような前提のもとに、「体育学研究」の書式にのっとり引用する場合についてお示しします。

・ホームページやホームページに掲載されている PDF ファイルを参考文献とする場合

(著者名, 発行年) または (著者名, online) と表記します。発行年が特定できない場合に、(著者名, online) と表記します。

次のホームページを引用する場合は下記のようになります。

文部科学省 (2007) 問題行動を起こす児童生徒に対する指導について (通知).
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/07020609.htm

文部科学省 (2007) の調査では～

書籍や論文を引用する場合と変わらないと言えます。また、ホームページ上のコラムを引用する場合は下記のようになります。

大峰光博. 勝者と強者. <http://www.meio-u.ac.jp/winner-the-strong>

～の取り組みについて説明されている (大峰, online)。

このコラムは、掲載された年がホームページ上に記載されていないため、発行年を示す箇所は“online”となります。

応用編

・同一著者の文献が複数ある場合

研究者は1つのテーマを長年に渡って続けることが常です。そのため、1人の著者が幾年にもわたって、1つのテーマで論文を書き続けることがあります。それら複数の研究成果を引用する場合には、括弧内の発行年をコンマ (,) でつなぎます。次の3つの参考文献を引用する場合は下記のようになります。

小番 達 (1992) 延慶本平家物語における鬼界島説話の一考察：熊野信仰関連記事を中心として. 語文論叢, 20 : 31 - 43.

小番 達 (1998) 建礼門院大原入りの契機 -物語の叙述意識に関わって. 語文論叢, 26 : 39 - 54.

小番 達 (2008) 『平家物語』に見る「生と死」：平重盛の熊野参詣をめぐって. 国文学解釈と鑑賞, 73 (3) : 94-100.

↓

小番（1992，1998，2008）によれば～

また、1人の著者によって、同じ年に複数の論文や書籍が出されることもあります。このような場合には、発行年の後に a, b, c, …をつけて区別します。次の参考文献を引用する場合は下記ようになります。

大峰光博（2016a）大差の勝利を目指すことに対する多様な考え．名桜大学編 名桜叢書第3集 明日を切り拓く．名桜大学，pp.235 - 243.

大峰光博（2016b）野球における暴力の倫理学．晃洋書房．

大峰光博（2016c）運動部活動における生徒の体罰受容の問題性：エーリッヒ・フロムの権威論を手掛かりとして．体育学研究，61（2）：629 - 637.

↓

大峰（2016a，2016b，2016c）によれば～

・講演の内容を引用する場合

通常、論文を作成する上では、講演の内容を引用することは稀です。そのため、本節で用いてきた「体育学研究」の書式には、講演についての詳細のルールは存在しません。一方で、授業で課されるレポートについては、講義や講演の内容を引用する必要性が出てきます。

講演や授業の内容について引用する際には、レポートの末尾に「注」を設けて表記することが適切であると考えられます。「注」は本文、あるいは図表で説明するのが適切ではなく、補足的に説明することが必要な場合に用います。「注」は論文を作成する上でも、非常に重要な役割を果たします。以下に講演の内容について示す場合を示します。

バルセロナ・アトランタオリンピックにおける水泳の日本代表選手であった千葉氏は、水泳に対する思いを述べている¹⁾。

注

1) 2018年1月19日に、名桜大学の多目的ホールで開講された『大学と人生』による講演内容によるものである。

なお、講演者は論文や書籍の著者ではないため、氏や敬称を略さないことが望ましいと言えます。

4. 1次資料と2次資料

資料には、オリジナルなもの（生の資料）とオリジナルでないもの（他人の手を経た資料）があります（葛生，2007，p.86）。前者を1次資料、後者を2次資料と呼びます。1次資料と2次資料については、以下の原則に沿って用います。

① 可能な限り、1次資料を参照し、使用しなければならない。孫引きは避ける。

具体的な例をあげて説明します。私はこれまでに、文部科学省によって2007年に公表された体罰

に関する報告書を引用して、2016年に論文を執筆した経験があります。皆さんが体罰に関してレポートや論文を書く必要に迫られ、私の論文を読んだとします。そこで皆さんは、私が引用した文部科学省による報告書の内容を用いて、レポートを書きたくなると仮定します。しかしながら、皆さんは私の論文から文部科学省による報告書の内容を引用してはいけません。1次資料である文部科学省の報告書を手・確認して、レポートを書く必要があります。原典である1次資料にあらず、2次資料である私の論文からレポート・論文を書くことを孫引きと言います。では、なぜ孫引きを避ける必要があるのでしょうか？

私はこれまで、2次資料に書かれた内容と1次資料に書かれた内容が異なっていたケースを何度も目の当たりにしました。2次資料で示された語句が1次資料と異なっていたケース、引用されたページ数が違っていたケース、さらには、意味の解釈が異なっていたケースもありました。このような結果に至るのは、いくつか理由が挙げられます。まず、自身の望む論理展開に合致させたいために、意図的に1次資料を捻じ曲げて解釈するケースがあります。また、捻じ曲げて解釈をする意図はないにもかかわらず、その解釈が正しいと勘違いをしてしまうケースもあります。さらには、単純な表記ミスのケースもあります。

伝言ゲームのように、スタートの情報とゴールの情報が異なることは論文においても起こりえるため、皆さんは可能な限り1次資料を参照して、論文・レポートを作成しましょう。

② 1次資料が参照困難な場合に限り、2次資料を利用する。

大抵の場合、2次資料に記載された参考文献の情報を頼りにして、1次資料を入手することが可能です。しかしながら、1次資料が入手困難な状況も存在します。例えば、日本には存在せず、ある国の1つの図書館にしか保管されておらず、かつ、持ち出しが禁止されている文献も存在します。時間とお金をかけて、その国の図書館で資料を確認することがベストではありますが、そのような選択が可能な人は多くはないでしょう。このような場合には、2次資料を利用せざるを得ません。2次資料を用いることは絶対的な悪ではありません。しかしながら、2次資料を用いたにもかかわらず、さも1次資料を用いたようにレポート・論文を作成することは絶対的な悪と言えます。1次資料が入手困難であり、2次資料を利用した場合は、レポート・論文にその点について明記するようにしましょう。

上述した2007年に公表された文部科学省の報告書を確認せずに、私が2016年に執筆した論文から文部科学省の報告書の内容を引用した場合には、引用の表記は、文部科学省(2007)の調査では～とするのではなく、大峰(2016)によれば～と記述しなければなりません。

③ 2次資料において、1次資料に関する解説や批判がなされている箇所については、2次資料を利用する。

1次資料の内容が、絶対的に正しいとは限りません。1次資料に対しては、様々な研究者によって解説や批判がなされることがあります。それらの解説や批判を確認し、レポート・論文を作成することは必要な作業であると言えます。1次資料に関する評価の客観性を保つうえでも、十分に2次資料にも目を通しておきましょう。

5. 実際の論文の引用方法について知る

※「体育学研究」の論文を配布して、適宜、引用の方法について説明する。その際に、人文学・社会科学、自然科学の論文の双方を1部ずつ配布して、その傾向について説明する。

(参考論文)

①自然科学系論文

大島雄治・藤井範久(2017)最大疾走速度局面における内転筋群および腸腰筋の機能について. 体育学研究, 62(1): 1-19.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/62/1/62_16011/_pdf/-char/ja

② 人文・社会科学系論文

竹村瑞穂(2014)競技スポーツにおける身体的エンハンスメントに関する倫理学的研究: より「よい」身体をめぐる. 体育学研究, 59(1): 53-66.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/59/1/59_13050/_pdf/-char/ja

☆練習問題 I

1、手持ちの書籍を引用しなさい。

2、名桜大学のホームページにアクセスし、学科・専攻のディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与方針)を引用して説明しなさい。

文献

葛生栄二郎(2007)レポート・論文. 田代菊雄編 学生・院生のための研究ハンドブック. 大学教育出版, pp.83-95.

新村出編(2008)広辞苑(第6版). 岩波書店.

高橋祥吾(2014)引用の作法について.

<file:///C:/Users/user/Desktop/問題集作成/引用の作法について.pdf>, (参照日 2017年11月25日).

山内志朗(2001)ぎりぎり合格への論文マニュアル. 平凡社.

